



永年会員 名畑 清信



1944年5月富山県生まれ、1968年新潟大学農学部卒業。同年4月富山県に採用され、試験研究、農業改良普及および行政の多方面で勤務する機会に恵まれた。

奉職後農業改良普及所での三年間の現場勤務ののち1971年4月に富山県農業試験場に設置

された農林水産省の「花き球根病害防除」に関する指定試験地に配属され、主任として赴任された草葉敏彦博士の指導のもと1987年3月までの16年間にわたりチューリップ一筋に研究に従事することができた。研究の中心テーマはウイルス病に関するものであったが、細菌による病害の激発を契機にその対応にも携わった。

ウイルス病については(1)産地としての栽培がされた大正時代の初頭(1919年頃)から不明な点が多かったチューリップモザイク病について、主要な病原ウイルスがtulip breaking virusであることを明らかにし、圃場での実証試験に基づく防除法を確立した。また、汁液接種による品種抵抗性の検定方法を確立、Darwin及びDarwin Hybrid系統に属する品種の中に強い抵抗性を有するものがあることを示し、そのいくつかは新品種育成の交配母本として広く活用されている。(2)さらに、1976年に富山県のチューリップ球根栽培地で葉や蕾に褐色のえそ斑症状を示す病害が局部的に激発して大きな脅威となったが、その原因は土壌中の*Ophiostoma*菌によって媒介されるtobacco necrosis virusによるものであることを明らかにし、えそ病と命名して本学会で発表。連作した場合に多発することに着目し、一旦発病した圃場では約3~4か月間高い感染性が保持され、連作が急激に発病を拡大させた要因であることを明らかにした。また、早植えや圃場が湿潤な場合に多発することなどを実証し、圃場の過湿を避け、遅植えすることなどによる発生生態に基づく防除対策を確立した。これらの成果を取りまとめた「チューリップウイルス病の発生生態と防除に関する研究」により1986年6月に北海道大学から農学博士の学位を頂いた。

細菌病については、細菌に造詣の深かった草葉博士の指導のもと(1)1972、1973年に激発し、長い間暖冬年に発生して風土病のように考えられてきた、くしゃくしゃ病と呼ばれた病害が*Corynebacterium*属細菌(現*Curtobacterium*属)によるものであること(かいよう病と命名)、(2)また、1973年頃から球根の出荷後に消費者の手に渡ってから発

病し、大きな問題となった病害が*Pseudomonas*属細菌(現*Burkholderia*属)によるものであること(黒腐病と命名)など、草葉博士から細菌学的研究手法を学びながら、種の同定や防除対策の確立などに関する試験研究に携わることができた。

1982年4月農林水産部普及技術課病害虫の専門技術員として転任。その後農試病理昆虫課長、普及技術課専門技術員班長、農林水産部参事・普及技術課長などを歴任、2004年3月に農業技術センター農業試験場長で退職。(財)花と緑の銀行花総合センター部長、(株)山正技術顧問などを経て現在同社相談役。

受賞；①優良職員表彰(1987年1月、富山県；チューリップウイルス病新防除技術開発による球根生産安定に寄与)、②農業技術功労者表彰(2004年11月、(財)農業技術協会；チューリップ球根病害防除技術の確立と普及)。

私の研究従事期間はそれほど長くなかったが、指定試験地に配属されたことで、一つのテーマで16年間も研究できたのはとても幸運なことでした。また、ウイルスの純化や血清学的手法の習得などについては、植物ウイルス研究所(当時)、黒腐病菌の同定には農業技術研究所、同病の病原細菌電顕観察には北陸農試など、国の研究機関の諸先生方に全面的なご支援を頂くことができました。指定試験地配属当初から終始懇切なご指導をいただいた草葉博士、お世話になった国研の皆様、同僚の皆様、さらには植物病理学の手ほどきを頂いた母校の天野幸治先生はじめ、陰に陽に研究活動を支えていただいた多くの方々にあらためてお礼申し上げます。この度の永年会員への推挙は農業の現場に近いところで研究をしてきた者にとって大変光栄なことであり厚くお礼申し上げますとともに、本学会の益々の発展をお祈りいたします。